

日本漢字能力検定協会による平成30年の世相を「災」に決ま「今年の漢字」が「災」に決まり12日、京都の清水寺で発表された。平昌五輪やサッカー、テニスなどスポーツ界を中心に日本の若者の活躍が社会に明るい話題を振りまいた年であった。そのため夢や希望が持てる「字がふさわしいと思うが、大阪北部地震、西日本豪雨、北海道胆振東部地震など度重なる天「災」に見舞われたこともあり選ばれた理由にうなずける。

東日本大震災からの復興を願うイベントのため1日、岩手県山田町を訪ねたとき山田湾に面する漁港から海を眺めていた。すさまじい力が襲い、人々の人生を大きく変えてしまったあの

# 人々の強さを感じた一年

## B&G財団理事長 菅原悟志



〈すがわら・さとし〉大正大学客員教授。日本ゲートボール連合理事。日本海事科学振興財団(船の科学館)理事。

汗して活動をする、その姿は私の心に深くそして長く残り続けた。

震災で親と子供を亡くした陸前高田市に住む知人女性は、津波で流された店舗をこのたび再開した。本当の悲しい胸の内は本人しか知りえない。言えるのは彼女がそんな日々を自分の力で乗り越えようと、未来に目を向けて動き始めたことである。

そこに人間としての強さを感じる。災害の記憶や記録の風化が懸念されている。記録の風化

和らげることができているのが大人であり果たすべき役割は大きい。

「今は大変な時だから自分たちが動かなければ」「一日も早く生まれ育った町に戻りたい」と釜石の高校生たちが語っていた言葉を思い出す。そんな前向きな姿勢が行動に変わったのだろう。私たちは震災によりこれまで気づけなかった人間の本质を覗くことができた。もしかしたらそこからしか本当の姿を見いだすことができないのかもしれない。

日とは違い海はとても穏やかだった。そして震災の爪痕を感じさせないほど奇麗に整備されていた港。全壊したが再建し今夏、オープンしたB&G海洋センターの艇庫。だがそれらの美しさが逆に被害の甚大さを物語っているようでもあった。

7年9カ月前、岩手県と宮城県の被災地にいた。町全体が跡形もなく瓦礫の山と化した光景を見て自然の脅威を認識し言葉を失っているとき、岩手県釜石市で救援物資の積み込み作業を行っていた地元高校生の存在があった。なかには家族や友人、自宅など大切なものをなくした人がいると聞いた。苦しい状況下でも他の被災者のために額に

## ■ 解答乱麻 ■

は防ぐべきだが、記憶の風化が悪いかどうか私には分からない。被災者が心に負った深い傷を少しずつ忘れ、一日でも早く立ち直ってくれることを願ってやまないからだ。あれほど大切だった人との出会いや別れも時間とともに記憶は薄れていく。

それが自然でありそこに罪悪感はない。忘れていけないのはどんなにつらいときでも子供にしっかりと目を向け、耳を傾けることだ。大人が見せる表情や態度を子供は敏感に感じとる。悲しい顔をしていれば胸が揺れ感じ、不安を抱く。大人にしてほしいこと、掛けてもらいたい言葉は数多くある。甘えたいが堪えてしまつこともある。心を

れない。失うものは大きいが大切なことも得るのが災害時だ。すでに大人になったあのときの高校生たちは新たな家庭を築いているかもしれない。希望のある生活を送っているだろうか。答えは人の数だけある。

かつてないほど大きな天災が相次ぐわが国。いつどこで起こるか分からない。だからこそ安全に暮らせる場所などないことを肝に銘じたい。人は選べなかったもう一つの人生に嫉妬してしまいがちだ。だが誰もがみんな、過去に逆戻りすることや未来を予測することはできない。これから訪れる幸福も不幸もすべて受け止めて自分自身で歩んでいかなければならない。